海は知っていた

ルイーズの青春

キャサリン＝パターソン作　岡本浜江訳

作者／キャサリン＝パターソン

1932年、中国生まれ。1957年より4年間日本に滞在。日本を舞台にした作品も書いている。『テラビシアにかける橋』（1978）『海は知っていた』（1981）でニューベリー賞受賞。

訳者／岡本浜江

東京に生まれる。東京女子大英米文学科卒業。記者生活を経て、現在英米文学の翻訳に活躍。訳書に『テラビシアにかける橋』『ガラスの家族』など。

海は知っていた——ルイーズの青春 ©Hamae OKAMOTO 1985

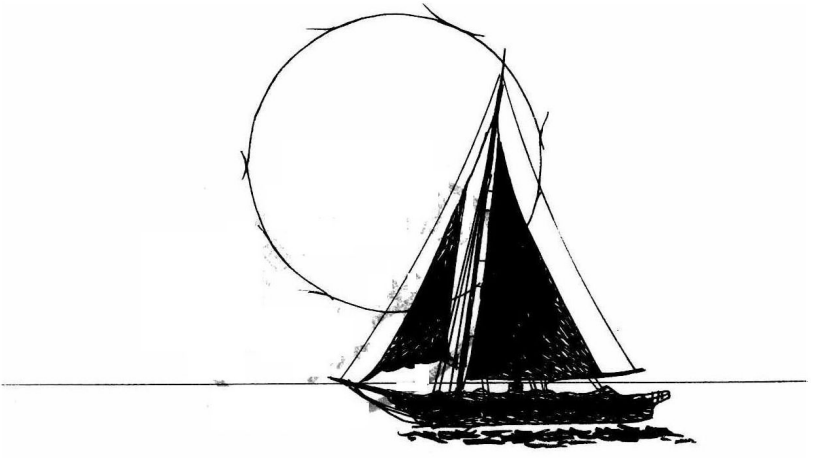
作　者　キャサリン＝パターソン
訳　者　岡本浜江
発　行　1985年11月初版1刷
発行者　今村廣
発行所　東京都新宿区市ヵ谷砂土原町3—5　**偕成社**
印刷・製本　中央精版印刷
NDC933　330p　19cm　　ISBN4-03-726290-8

Published by KAISEI-SHA, Ichigaya Tokyo 162
Printed in Japan.
落丁本・乱丁本はおとりかえします。

海は知っていた

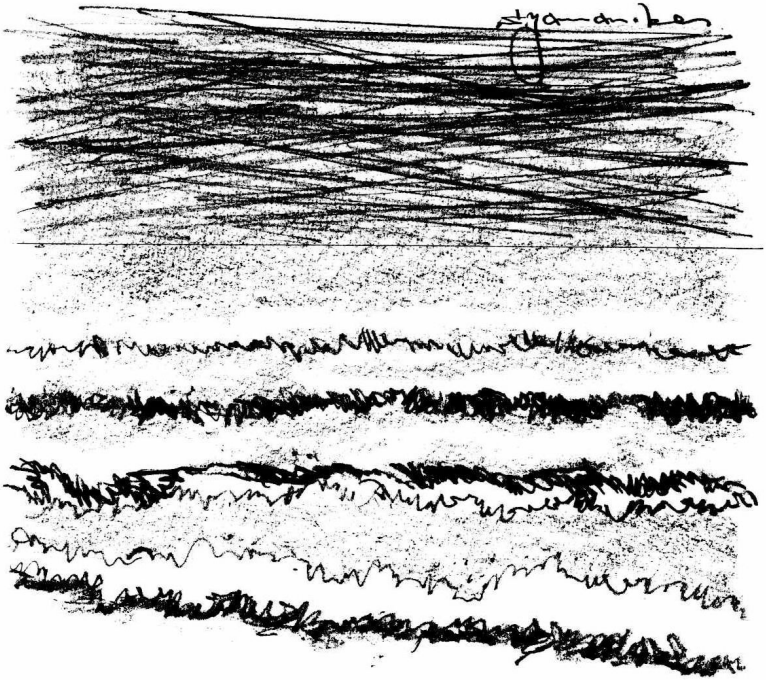
――――――ルイーズの青春

キャサリン＝パターソン 作　岡本浜江 訳



JACOB HAVE I LOVED
© Katherine Paterson 1980
Originally published by Thomas Y. Crowell Co.
Japanese translation copyright © KAISEI-SHA Co., Ltd. 1985
arranged through Japan Uni Agency, Tokyo

カバー絵・さし絵　山野辺 進



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ラス島

この雪がとけたらすぐ、ラス島に母をむかえにいこうと思っている。クリスフィールドでフェリーにのり、いつも女たちがあつまっている船室へおりていこう。けれど四十分ほどその固いベンチにすわったあとは、きっと立ちあがって、前方の高い船窓から、いち早く故郷の島を見ないではいられないだろう。

そのあたりまでいくと、チェサピーク湾のあせたオリーブ色の水の中には、カメの甲らのようにひらべったく横たわるラス島が見えてくる。そして、いきなり湾のむこうに、メソジスト教会（キリスト教プロテスタントの一宗派）の尖塔が、姿をあらわす。足もとにひとかたまりの白い下宿屋をしたがえるようにして。それからは、もうあっというまに港にはいっていて、フェリーは、ビリー船長のペンキがはげた二階建てのフェリー・ハウスのわきに横づけになるだろう。

フェリー・ハウスはそのとなりの、船長がカニの積みだしにつかっている細長い平家建ての小屋に、よりかかるようにして立っている。さらにそのとなりに、あざやかな緑のペンキをぬられてつんと立っているのは、郵便局も兼ねたケーラムの雑貨屋。これらの建物のうしろの、せまいけれどがっちりした山の背に、村の家いえと白いフェンスがならんでいる。高い木はあまりない。一面に緑がひろがって見えるのは、スイカズラ科の灌木が茂っているせいだ。

フェリーからおり立つところは、まるで桟橋の迷路。その桟橋の一つに目を走らせていくと、張り板のはてには、きまって、漁師がカニをかこったり荷づくりしたりするのにつかう小屋がある。

もしそれが春のおわりなら、カニ小屋のまわりには、割り板のいかだがいっぱい浮かんでいる。脱皮するまでのカニをたいせつに湾の水の中にかこってあるのだ。やがて脱皮したやわらかなカニは、アマモにつつまれて箱につめられ、ビリー船長の小屋にはこばれて、本土に送られる。

カニ小屋よりもっとだいじなのは、桟橋につながれている船だ。どの船も、よく見ればその持ち主の漁師と同じにそれぞれちがうのだけれど、ちょっと見

には、区別がつかないくらいよく似ている。

へさきに小さな船室があって、波よけ板は、人ひとりが小走りでへさきからともにうつれるていどの幅。船腹には、エンジンの前にもうしろにも、つぎの日の獲物を待ちうける樽が十数個と、金網でできた鳥かごのような、予備のカニ獲りかごが一つ二つ、空の餌かごがいくつかころがっている。またチェサピーク湾の海底からカニ獲りかごをまきあげるウインチがあり、そのわきには、大きな洗いおけが一つある。この中にカニ獲りかごの中味をあけて、捕獲していいサイズのカニ――固いのや、脱皮しかかっているのや、やわらかいのやを、小型のカニや、そのほか湾が気前よくくれてよこしたフグ、クラゲ、海藻、貝がら、ごみなどからよりわける。

どの船も、船尾には名前が書いてある。たいてい女名前で、その船がいつからつかわれはじめたかによってちがうが、漁師の母とか祖母の名が書かれている。

わたしたちブラッドショー家が、二百年以上も住みついてきたこの村の面積は、島のわずか三分の一ほどを占めているにすぎない。あとは海水の湿地であ

る。子どものころ、わたしは、ひそかに暖かい春の日がおとずれるのを待っては、くつをぬぎすて、腰の丈ほどもあるコードグラス（イネ科の湿地植物）のあいだに立って、冷たい泥水がつま先にじんわりあがってくる感触をたのしんだ。

場所はごく注意してえらんだ。というのは、コードグラスだけでも肌をすりむきそうなのに、ここにはブリキのかけら、ガラスのかけら、せとものだの、まだ潮ですりへっていないぎざぎざの貝がらがうちあげられていることが多いからだ。鼻先にかすかな干草に似たコードグラスの香りと、湾の黒ずんだ水のにおいがただよい、春の風が耳もとをひんやりと吹きすぎると、両腕に鳥肌が立つ。そしてわたしは、陽に手をかざしては、遠い水の上を見やり、父の船が帰ってこないかとさがしたものだった。

わたしはラス島を愛する。これまではあまり深く考えなかったけれど、ひとたび母がこの島を去ってしまったら、あとにはもうブラッドショーという名の者がひとりもいなくなるのだと思うと、たまらなく悲しい。もうわが家には、わたしと妹のキャロラインしかのこっていない。そしてそのどちらも、島には住めなかったのだ。

1

一九四一年の夏の週日、わたしは毎朝、満潮にのって、海に出ていた。マッコール＝パーネルと二人でわたしの小舟にのって、カニを追いかけていたのだ。コールもわたしもけっこうカニ獲りの名手で、家に帰るときは、なにがしかの現金と、夕食用のカニをたっぷり手にいれていた。コールはわたしより一つ年上だったから、もし父親が死なずにいて、ほんものカニ獲り船にのせてもらえれば、女の子とカニ獲りなどしていなくてもよいはずだった。ところが、かれは、すこし幼稚な上にとてもぶで近眼なので、たいていの島の少年たちから、のけものにされていた。

コールとわたしは、いいコンビだった。わたしは十三歳で背が高く、骨太で、色も恋もよくわかっていない女の子。コールは十四で、ずんぐりの眼鏡少年、およそセンチメンタルなところはなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ねえ、コール」とわたしは、チェサピーク湾の真紅の朝焼けを見つめながらよくいった。
「あたしが結婚する日の朝も、こんな空だといいな。」
「だれと結婚するんだい？」
コールは、けっして悪意でなく、まじめに事実を知ろうとしてそうたずねる。
「うーん、まだそういう人にあってないんだ。」
わたしは、ある日そう答えた。
「んじゃ、そういうことにはなんないよ。ここは小っこい島だもんな。」
「島の人とはかぎらないじゃない。」
「ライス先生は、ボルティモアに女友だちができたっていうし。」
わたしはため息をついた。ラス島の女の子の半分は、ここの高校の二人しかいない教師の一人、ライス先生に想いをよせている。わたしたちの知るかぎり、この先生が、独身とされているただひとりの男性だからだ。けれど、そのライス先生も、ボルティモアに心をよせる女性がいるという噂が立っていた。
「だけどさあ」わたしは小舟を竿でこぎながら、じぶんの結婚式から、ライス先生の結婚にロマンチックな空想をひろげていった。「もしかしてさ、その女の人の両親が、結婚に反対

してたらどうなる？」
「なんで、そんなことになるんだ？」
左舷の波よけ板の上に立っていたコールは、大きな海ガメの頭らしいものをみつけたので、そっちに注意をむけながら答えた。
わたしは竿を左舷にうつした。その大きさのカメなら、ちょっとした値段になる。海ガメは、わたしたちが近づいたのに気づいた。あわててアマモをすりぬけて海底の泥にもぐろうとしたが、コールが網をはっておいたので、カメはかくれ場に鼻をつっこんだとたん、ぎゃくに水面にひっぱりあげられ、待っていたバケツにほうりこまれた。コールが満足そうにうなった。これ一つで、ざっと五十セント、やわな青いカニの十倍の値段になる。
「その女の人が、なにかへんな病気もってて、かれの重荷になりたくないと思ってるとかさ。」
「だれが？」
「ライス先生のふいあんせよ。」
本を読むからことばは知っているのだけれど、発音がよくわからない。そのことばは島の人びとのしゃべる語彙にはなかった。

「先生のなに？」
「結婚の約束をした女の人よ、ばかね。」
「なんで、病気だなんて思うんだい？」
「そしたら、いっしょになるのが、おくれるじゃない。」
コールはぐいと首をまわして、いつもの顔でわたしを見たが、小舟の波よけ板はのっかっているだけでせいいっぱい。コールはわたしをじっとみつめて、舟から落ちるようなばかなまねはしなかった。そして、またくだらないことといってとばかり、アマモのほうに注意をもどした。
わたしたちは水の上にいると、じつにいいコンビだ。わたしが、すばやく静かに小舟をあやつり、コールは目が悪いのに、アマモや泥からカニのはさみの先がちょっとのぞいただけで、すぐにみつける。みつけたらめったにのがすことがなく、わたしが間髪いれずに小舟をこぎよせるのを知っている。だからこそ当時コールはわたしにくっついていたのだ。
わたしがコールにくっついているのは、仕事がうまくいくというだけでなく、あまりにもスムーズなチームワークなので、はたらきながら、勝手にロマンチックな空想をたのしむことができるからだった。

その程度のわたしの性格をコールに知られても、いっこうにかまわない。コールにはわたし以外に友だちがいないから、ここでしゃべったことを他人にしゃべって笑いの種にされる心配はない。コール本人は、けっして笑わなかった。

けれど、わたしはこれをコールの性格の欠点だと思っていたから、なおしてやろうとして、よく冗談をいった。

「ねえコール、ラジオのアナウンサーって、疱瘡(天然痘)にかかってアバタだらけなのよ。」

「へえ?」

「だってこのホウソウは、このホウソウはって、いつもいうじゃない?」

「へえ?」

「わかんないの? コール? ホウソウよ、ホウソウ――」

わたしは竿をはなして、右手を、コールの目の前でふりまわした。

「ホウソウのおかげで、アバタだらけってこと。」

「見たことないくせして。」

「見たって、なにを?」

「ラジオのアナウンサーをだよ。」

「そりゃ、ないけど。」
「じゃあ、なんで、アバタができてるってわかるんだよ？」
「そうだけどね、コール、これは冗談なのよ。」
「アバタかどうかわかりもしないもんが、なんで冗談になるのか、わかんないな。もしかしてアバタじゃなかったら、嘘ついてることになるじゃないか？　そのときは、冗談はどうなるんだよ？」
「ただの冗談なんだってば、コール。本当だとか本当でないってのは、どうでもいいの。」
「おれには、どうでもよくないよ。なんでみんな嘘いっておもしろがるのかなあ？」
「いいのよ、コール。そんなことどうでもいいの。」
けれどコールは、まるで年とった牧師さんみたいに、本当のことをいわなきゃいけないとか、もうラジオのアナウンサーのいうことも信用できないとか、つぶやきつづけた。
でも、わたしはこんなことであきらめたりはしない。
「ねえ、コール、弁護士と、歯医者と、精神病の医者が死んで、天国へいった話、聞いたことある？」
「飛行機でもおっこったの？」

「ちがうわよ、コール。冗談よ。」
「ああ、冗談か。」
「そうよ。ねえ、いい？　その弁護士と、歯医者と、精神病の医者が三人とも死ぬのよ。そして弁護士がまっさきに天国へいったの。するとペテロがいったの――」
「ペテロってだれ？」
「聖書に出てくるペテロよ。キリストの弟子の。」
「そのペテロなら、もう死んでるよ。」
「あったりまえじゃない。」
「だっていま、いったじゃないか――」
「ちょっと、だまって聞きなさいよ、冗談なんだからさ、コール。その弁護士が、ペテロのとこへいって、天国にはいりたいっていったのよ。」
「いまさっき、もう弁護士は天国へいったっていったくせに。」
「ちがうの！　ただ〈真珠の門〉までいっただけ。いい？　とにかく天国にはいりたいっていったらね、ペテロが、どうだろうねえって首かしげたの。それから本をしらべて、その弁護士は悪いやつだ、人をだました悪者だ、地獄へ落ちやがれえっていったの。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com